

報告1

「東京の森林林業と農山村」

小机 篤氏

協同組合 東京・杣人の連
あきる野市・木こり



水源としての小菅村の姿

この頃の木こりは山で木を切らないで都会で切っています。ちなみに10日ほど前、学芸大学の前に小金井の駅がございませぬ。南口再開発です。今大きなお屋敷の中は何も無くなっちゃってますが、あそこに行って、こんなに大きいサクラだとかケヤキだとか、切ってまいりました。ということで、この頃の木こりは山の木に登らずに都会の木に登って頑張っています。

ちなみに、私は若い頃は勉強が大嫌い、話は人の前に出ると頭の中が真っ白になっちゃって、何を言っているかわからなくなっちゃって、『ごめんなさい』という感じでした。試験の点数も0点に果てしなく近い点数を取っていました。いつこういう風になったのかなと思うと、仕事で下刈りやったり、枝打ちやったり、チェーンソーを使ったり、その仕事が好きになってから、皆さんの前へ出て一人一人の顔が、可愛い子がいるなとか、格好いいおじさんがいるなとか、分かるようになりました。それまで相当な時間が、何十年もかかりました。

ということで、話は取り止めもなくなってしまうかと思いますが、学校や大学の先生、本日参加している人とは違って、喋るのが商売ではございませぬので、悪しからずよろしくお願いします。

それで小菅村ですけれども、隣の丹波山村も含めて東京都の水源林ということで、昔水道局がなかった時代ですよ、その前から、東京に都が移ってから源流の方をどうにかしなくちゃいけないということで、東京府がお金を出して、山梨県の東京へ流れてくる川の水源の土地を二万haも買ってしまったという、ただその東京がお金持ちだったんでしょうね。昔の人が言ったのだと思うのですが、「住む人の 心を映す 水の色」という句があります。小菅の川はすごく綺麗ですよ。水が澄んでいます。ヤマメもイワナも元気に泳いでいます。

昨日はちょっと早めに来たのでうろろろしていたら、

ジャージを着た中学生がわさわさしているんですね。何かと思ったらマラソンして頑張っていました。若い子も頑張っているという感覚がありました。

私はサケ科の魚が好きであちこち歩いているんですけども、小菅の川にも丹波の川にも何回か来たことがございませぬ。大変にいい魚が釣れました。

ということで、水が循環しながら私達の生活を支えてくれているという風に思っています。

水源の話が出ましたけれども、もうすぐ東京都に入る辺りで奥多摩の湖が広がっているんですけども、奥多摩湖というのは、日本で数少ない土砂の流入が極端に少ない湖だそうです。相当な水量があるけれども、あちこちでダムの放流で川がぐしゃぐしゃになっちゃってどうしようもなくなっちゃっています。ダムというのは水を溜めるために造ったんですけども、水を溜めずに土砂が溜まっちゃってるといような状況がほとんどだそうです。

帰りにご覧になってみれば分かると思うんですけども、村から東京都へ入る頃、普通だったらこら辺もすぐ砂場になっちゃっているところが、ほとんどそれが見られないということを確認していただきたいと思ひます。というのは、いわゆる山梨県の方々が、東京都もお金を出しているんですけども、ちゃんとしっかりした自然の中で山を造ってくれているということなんです。

過去そして現在の林業を取り巻く環境

それをもう一度こうやって見て、スギ・ヒノキが植えられています。カラマツも植えられています。それは先代、先々代が一生懸命道もなかった頃苗木を一本一本担いで、鋤担いで、弁当背負って、水背負って、この林道もなかった時代にこんなところへよく来たな、と。50年も60年も前、60年という私と同年で1948年。再来年赤いちゃんちゃんこ着るような年なんです。まだ、大先輩もいらっしゃいますけれども、それよりも前に、いわゆる戦争前に植えた60年、70年、80年経った木がそこら中にあるんです。

機械もない、車ももちろんない、それこそリアカーが引ける道もない、肩で背負って鋤担いで植えた山があったからこそ、今のこの小菅川の清流が流れているのではないかな、と思ひます。

立木があるんですから、切ったんです。切らなきゃ植えられません。切るということで初めて林業が成り立つんです。その繰り返しでした。切ってからこれは使えなぞ、薪に使えなぞ、炭にできなぞ。雑木を切れ

ば萌芽してきます。植えなくていいんです。スギ・ヒノキを切って家を建ててみました、これはいい家ができたぞ、じゃあスギ・ヒノキの苗木作って植えておこう、と。切って、植えて、育てます。どういう木が欲しいか、真っ直ぐで節のない木が欲しい。雪で寝たら起こしてやる、節がないように枝を打ってやる、その繰り返しを何百年も続けてきた訳なんです。

それが現在では、いわゆる木材不況、景気も悪いというのでなかなかその繰り返しができなくなってきているのが現状でございます。極端な話を申し上げますと、私が40年近く前に家業を継いで林業を始めた頃は長杉、いわゆる足場丸太を、今は鉄パイプですけれども、長さ四間くらいのを、都道付きにトラックが載せられる様に置いてあると、一本現金で千円から千二百円で売れたんです。それが一本あると、山の作業員が一人雇えたんです。ということは、「山に行って仕事をした帰りに一本背負ってきてくれよ」と言って持ってきてもらえば、山主さんはそれで一日の日当が賄えたんです。そういういい時代もございました。

今は持ってきてても売れませんし、材木もそれこそ反・歩いくらって感じですね。4t車一台持ってきててもこの頃うるさいので4t車には4tしか積めないんです。昔は私も実際に走りましたが、10t積んで走れるんです。そうすると一台三十万から五十万しました。今、4t車に4t積んでも二万円です。1tで五万円。いい物だけ持ってきてても2万円ちょっとですから、八万円にしかなりません。ということは、昔の国鉄じゃないですけども、百円分の収入を上げるのに、五百円もかかってしまうのです。そんなことをする人はいません。だから山が丈夫に育たなくなってきました。

森林組合等で頑張ったけれども、なかなかいい木が出ないということで、私の地元の隣町ですけれども、青梅と五日市の間の日の出町というところに木材センターという市場を作ってみました。これも奥多摩湖に負けなくらい画期的なことだったんですけれども、山主と材木屋さんが一緒になって協同組合を作ったというのは全国に例がないそうです。

ということで、なるべく地元のものが高く売りたいということがありまして、自分たちで山主と材木屋さんと伐出業者さんも入ってます。製材業者さんも入ってます。皆さんがひとつになって、市場を経営しているんです。けれども昔は敵ってという感じの商売の仕方でした。私たちは木を高く売りたい、材木屋さんは仕入れる方ですから一円でも安く買いたいという駆け引きの中であまり仲が良くなかったんですね。だけでもその

人たちが一緒になって木材センターをつくって、今も頑張ってるやっています。

「東京の木で家を造る」ということ

それと、私がまだ若かった頃、30年も前に森林組合というのはどうも親父の集まりで話を分かってくれないということで、若い連中が集まってグループを作って、もっと何か面白い話はないか、儲かる話はないかと林研グループを作ったりしてましたけれども、それも今だんだん、木俣先生もご存知でしょうけれど、我々の仲間の田中君というのが今全国の会長をやっているんですけれども、彼が頑張ってるやってくれているのでバトンタッチしたんですけれども、それも鳴かず飛ばずみたいな形になってしまって、それでもっと何かないかと。そしたら、売れない材料が山にいくらでもあるからそれを切れ、と。最終的には家を造ってもらおうということで、ここにパンフレットが置いてありますけれども、東京の木で家を造ってもらおうということで「東京の木で家を造る会」という組合をつくっちゃいました。

組合の方が何人かいらっちゃって、東京の木で東京に家を建ててもらおう。奈良や京都へ行くときすごいお寺がたくさん建っています。それこそ見事な一抱えも二抱えもあるような大きな柱をそのまま使ってドンと建っています。それには千年経ってるヒノキを使うと。芽ぐんでから千年経ちました、それを人間が切って五重の塔を造りました。千年経つと一番堅くなるんだそうです。それから千年経つということは二千年ですよ。そしてあと千年かかって徐々に徐々に崩れてくる。千年の命というのは、メンテナンスをしてあげれば生まれてから三千年もつんだそうです。材木というのは素晴らしい力があるそうです。あと二千九百四十何年か生きてないと見られないんですけど、そういうことだそうです。

今こうやって話しているのも、みんな先代なり先輩なり、私より知識のある先輩、年が若くても私より知識がある先輩から教わったことを皆さんに話しているだけなんです。「あのヒゲおやじ、なんか面白いこと言ってたな」ということがひとつでもあったら次の世代に伝えてやってください。それが仕事だと思います。

こうやって木を切ってしまうと木がなくなってしまうので、ここにはパンフレットはないんですけども、私の名刺、「杢人（そまうど）」いわゆる木こりの集まりということで、これも協同組合をつくりました。所有山林関係なしで仕事のできる人が集まって、木に聞いて、山に話をして、次世代にいい木を残したいなという気

持ちで仕事をしています。それで一番先にお話した、小金井のお屋敷の木も、この「杣人の連」の仕事として伐採しました。

次の世代へ何を伝えていくのか

いろいろ私の仕事はあるんですけども、今後僕たちが、私たちがやっていかなきゃならないこいとはなんだろう。何をやってかなくちゃいけないか。先程もお話した通り、次の世代に技を伝えること。私で言うと木登りの技、刃物を造ることはできないので刃物を研ぐこと、刃を作ってそれを使うことができる技ですね。

のこぎりは使えたが、なぜ今チェーンソーか。のこぎりを引いたことがある人じゃないとチェーンソーは使っちゃいけないと思うんです。いきなりチェーンソーを持つから怪我をするんです。なとも、手で切れないからなたを使うんです。手でお魚を捌けないから包丁を使うんです。それが分かってないと怪我をしてしまう。とんでもない怪我になったりしてしまう。いきなり機械を使わずに道具から、手の延長の道具から機械になるようにしていった方が良くと思います。

ちょうど私が仕事を始めたころ、鎌を買ってきます、砥石も買ってきます。でもいくら研いでも切れないんですね。どんどん刃がなくなってしまうような状態です。上手に切れるな、と思ったのは数年前です。何十年もかかります。というのは、あの時はまだ切れてなかったな、と思うんです。今も今研ぐと、あの時はまだ去年の鎌は切れてないな、去年の鎌の方がよかったな、鍛冶屋がこれは上手に打てるな。それがようやく30年研いでないと分からないです。

そんな経験をずっとしてきて、何をしなくちゃいけないかということ、私が喋っていることは録音しておけば残っています。ただ残っているだけなんです。これを如何に読むことができる人がいるか。コンピューターに入っていれば、それを言葉として映像として見ることは誰でもできます。でもそれを実際に、このコンピューターに入っている種っていうのはここに貯蔵してあるこの種だ。それをどうすればいいのか、蒔けばいいのか。出ませんよって。先輩みたいなの、一から知っている人に手ほどきを教わらないとできない、ということなんです。それを伝えていかななくちゃいけないんじゃないのか、それがすごく必要じゃないかなとこの頃実に感じています。

一番最初にも言ったのだけれど、私が今喋っていること、仕事をしてやっていることは全部年寄りから教

わったことだけです。先生のお話からもあったんですけども、種を他所から持ってくる、我々も京都行って持ってきました。抱えるようにしてもらってきたり、いい実がなっていると「いいですか」って持ってきたり、そんなこともしました。

木・植物・動物、みんなそうだと思うんです。鉄砲ぶちもそうです。いい鉄砲があったら、そこに行って仕入れてきて獣を獲りたい。いい木があれば、あの木と同じものを将来自分で作ってみたい。この粟がすごくいいから、じゃあ貰ってきてうちの畑で作りたい。人間というのは欲張りですね、いいもの見ると全部欲しくなるんです。その欲しいという気持ち、自分のものにしたという気持ち。ただ、自分のものにしたなら「それはこうやるとできるんだよ」って次の世代に教えないと、自分だけでストップしちゃってそれで終わりです。社会で生活している人間であれば、伝えていくということが必要なんです。

今日サツマイモやジャガイモの話が出ましたけれども、サツマイモというのは、我々が言う薩摩藩の方から広がったからサツマイモで、九州の人は「唐（から）いも」と言うんだそうですね。唐から伝わってきたから「唐いも」だと。

檜原がすぐ向こうなんですけれども、山梨側は都留郡ですよ。特に檜原でも南側の南秋川の年寄りたちはジャガイモのことを「都留いも」という風に言っています。峠越して向こうから入ってきた、都留から入ってきたからジャガイモのことは「都留いも」だということです。40年程前に「都留いも」っていうから瞬間的にヤマイモのことだと思ったんです。蔓を伸ばして生えてますよね。でも話を聞いているとそうじゃないんです。よく話を聞いたらジャガイモのことでした。

そんな面からも、昨日も増田先生のお話の中に在来種というようなお話が出ていて、私も「同じ質問です」ということで細かく聞きました。のらぼうは野良に茫茫と生えていることから名前がついたアブラナ科の植物なんですけれども、ほんとにごく限られた地域で作られていて、「誰それさんののらぼうが一番美味しい」と。のらぼうはのらぼうなんだけれども、「隣のはダメだよ」というくらいシビアです。というのは、どこまでが原種なのか、それが突然変異で極端に美味しくなったのか分からないんですけども、種の出所は油を取るためと、茎が柔らかくて食べられるということで作っていたようです。

「住む人の 心を映す 川の色」ということで、川が綺麗になれば緑も綺麗になります。緑が綺麗になれば

空気も綺麗、皆さんの顔も綺麗になると思います。

失礼しました。(会場、拍手)

報告2

「小金井市における江戸野菜の復活」



土井利彦氏

NPO法人 ミュゼダグリ

ミュゼダグリの活動概要

ミュゼというのは日本語で言うと博物館。フランス語で農業博物館というかたちでNPOを作ってしまった。私に与えられてテーマは江戸野菜で小金井を元気にするというもの。用意した原稿に乗っ取ってお話します。

江戸野菜という言葉が出てきていますが、江戸野菜を中心に話をすることはしません。小金井での試みは江戸野菜を復活させることが目的ではありません。復活させることを手段にしながら小金井市をどうやったら活性化するかを考えて活動しています。

江戸時代ことに吉宗の時代の小金井は小金井桜を中心とした江戸の観光地でした。観光地ではありましたが、江戸に野菜を供給するということはありませんでした。隣の市である小平の廻田めぐりだというところの野菜は供給されていたらしいということは記録にあります。小金井では供給していなかったそうです。なぜ野菜が供給されていなかったかということですが、小金井は乾燥地で野菜はあまりできなかったらしいのです。

さていま、小金井では農地が消えています。さらに、かつての農業共同体のような地域共同体もありません。さらにもう1つとして若い人たちの働き口が意味のない働き口しかない。それらを前提として、小金井をどのように活性化していったらよいかと考えました。

なぜ農地が減ったのか

小金井市は元々郊外のベッドタウンとして人口増加してきました。小金井に限らず東京郊外の町は1960年以降人口集中化をさせてきました。そのころ、農地はどのような風に扱われていたかというと、宅地の予備軍としか考えられてきませんでした。1974年だったでしょ

うか、生産緑地法というのができました。そのときのやり方はいったん農地を都市計画化区域に組み入れた上で、特例措置としてあえて生産緑地法を作って、そこを農地として見なしましょうということでした。基本的には東京都の郊外、特に都市計画化区域の中の農地というのは、農地ではなく宅地としてみなされていて、ただ特例として生産緑地法で農地としてみなされているだけなのです。そういうわけでそれ以降どんどん農地が減ってきました。これは、それぞれの町にとってかなり驚異的な問題のはずです。というのも、元々江戸時代以降、日本の町というのは農地をくろみ込んだカタチで町ができていました。特に江戸を見ていただきますと確かに下町には長屋がいっぱいありましたが、大名屋敷では上屋敷下屋敷がありましたが、特に下屋敷ではその中に必ず農地が組みこまれていました。そこで大名がそれぞれ自分の国から持ってきた野菜栽培をしていました。そういう江戸の町だからこそ、幕末期に他国からやって来た人たちに江戸の町は美しい町、とても優しい町と認められていました。ところが、明治以降に都市計画の名の下に農地を町から外に追い出していき動きがどんどんできてきました。農地を追い出す一方でちゃんとした緑を残しておくということはせず、強固な土地所有制をつくり出しながら、かなり無計画な都市化がすすめられてきました。そのため、かなりつらい町ができたなという気がします。

住んでいる人々の意識

そういう問題と、後1つ、小金井のような郊外都市では制度的に農地が無くなる一方で、そこに住んでいる人たちはどういう人たちかと言いますと、1950年以降ベッドタウンとしてできていますから、元々そこに住んでいた村の人達ではありません。地元のことをちゃんと考えそこに住み着くかどうかほとんど考えない人たちが住みはじめたわけです。常に移転を繰り返す人たちの町になってしまいました。このことは、地域に関して自分たちのこととしていろいろな話をすすめていくのが難しい構造を生み出しました。

先ほど木俣先生が、日本はアメリカのいいところを学ばずにやってきてしまった、とおっしゃいました。アメリカの1番良いところと言うのは自治がしっかりしていることです。自分たちの町というものをこれほど大切にしている国はありません。アメリカの法律体系を見ますと、自分たちの一番身近な地域が1番大切にされています。そうやっているからこそ、自分たちの反対運動もはっきり出せる。「自分たちの町は自分達で救ってい